

## 注意事項

「」のPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

FAIRY TAIL ～木の滅竜魔導士の物語

### 【作者名】

吸血鬼

### 【あらすじ】

「」の作品は「FAIRY TAIL」のメンバーに加えオリキヤラを交えた作品となっています。

木の滅竜魔導士...アレス・フォレステイア

彼はナツと同じく7年前の7月7日に育ての親のフォレスバロムが目の前から居なくなってしまった.....。

「」の作品はアレスとナツ...原作通りの展開に(星空の鍵とかくらいまでは最低書きます)オリキヤラの過去が因果する物語をかけたならいいなと思っています。

# プロローグ 第一話 妖精の尻尾

フィオーレ王国……人口1700万の永世中立国。

そこは……魔法の世界。

魔法は普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた。そしてその魔法を駆使して生業なりわいとする者達が居る。人々は彼らを“魔導士”と呼んだ。

魔導士たちは様々なギルドに属し、依頼に応じて仕事をする。そのギルド、国内に多数。

そして、とある街に、とある魔導士ギルドがある。かつて…いや、後々に至るまで数々の伝説を 残したギルド。

これは… そのギルドに属する魔導士たちの物語である。

フィオーレ王国ハルジオンの港町

その町の駅に着いた列車に具合の悪そうにした桜色の髪にマフラーをした少年、ナツ と茶色い毛色で葉っぱのような服を着た猫、ボクル と何かの入ったケースを抱き抱え黒いグローブを着けた銀髪の少年、フォルト と青い猫、ハッピー がいた。

「あ、あの、お客様、大丈夫ですか？」

「あい」

「「クッ……」

「ああ、ナツはいつもこのつなので心配ないです」

おひおひとく惑つた駅員の質問に上から青い猫、茶色い猫、銀髪の少年の順に答えた。

「無理!!　うふ…　もつー一度と列車には乗らん…」

ナツは顔を青くして列車の窓に寄り添いながら言葉を発した。

「ナツ…大丈夫？　あいつと同じで乗り物酔いいつも酷いよねそれに、

いつも同じこと言つてるよね…

「あい!! それよりナツ、フォルト、情報が確かならこの街に火竜

サラマン

ダ一

がいるハズだよ

「ハッピー、フォルト、…………い」…………

「うふ……ちょっと休ませて……」

「はあ仕方ないなー、ちょっとだけだよナツ…………いこ、ハッピー…ポ  
クル」

「うふうふ（「クク）…………あつー」

「えっ何? ハッピー…ポクル…ええっ!! 列車…………出発しちゃった  
…………てつ!! ヤバイ」

その場にはナツの弱々しいたゞすゝけゝてゝという声が響いていた。

「列車には2回も、乗っちゃまつし」

「ははっ、ナツはあこつと回じで乗り物弱いしね」

ナツの咳きにフォルトは苦笑して答えた。

「それに…………お腹すいた」

「俺もポクリと回じでハラは減ったし」

「オイ!たちお金ないもんね」

「それは四人が…………、誰かさんのせいであいつ怪我で来てないけど  
…………もう少し早く言えば俺…………金を持ってきてたよ…………はあ~」

ナツ達の発言にフォルトは黒いグローブを着けた片手を額に着け

ため息を吐きながら一いつ返した。

「うぐつ…………それより、なあ ハッピー火竜 サラマンダー  
ってのはイグニールのことだよなあ」

その話しを突きつけられたナツはどこか動搖した表情をして話題  
を切り替えた。

「うん、火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「コクッ」

「だよな」

「やつと見つけた！それにイグニールなら……あいつの探してるフォ  
レスバロムのこととも知ってるかもしれないしな」

「ナツの『うつとうじフォレスバロムの』とも分かると良いね」

「あい!!」

「はあ～スルーか、でも……こんな街中にド……

「きやー」

「火竜様」

「きやーー」

「きやー」

フォルトが何かを伝えようとしたそのとき辺りに女性の黄色い歓声が届いた。

「えっ何!? 人だかり?」

「ほらフォルト!! 晴をしたらなんたらつて!!」

「あい!!」

「いこ、みんな… きつとイグニールだよ」

「イグール!! イグール!!」

「イグール!!! 誰だオマエ」

「!!!火竜 サラマンダーと言えばわかるかね?....はやつ」

ナツは火竜サラマンダーの発言を最後まで聞かずに肩を落として既に歩き出していた。

「ナツ.....大丈夫?」

フォルトは色々あつて先ほどの男を取り巻いていた女性達に放り投げられて地面に倒れていたナツに声をかけた。

そのタイミングに先ほどの火竜といつ男が「夜は船上でパーティーをやるよ、みんな参加してくれるよね」と言い残し指をならして炎の魔法を使い港へと向かっていた。

「なんだアイツは

「そうだね…ナツ

そのとき背後からハートクロイツ社のブランドの服を着て腰に数本の鍵と鞭を身につけた金髪の少女が……

「やつをやめあつがとね」

と声をかけてきた。

რრრ ქ  
რრრ ქ??